

〈 会員の広場 〉



## 社会教育主事講習を通じた大学での学び

滋賀県蒲生郡竜王町未来創造課 木ノ下 慶太郎

### 1. はじめに

私は現在、小さな町の地方公務員として働いている。そして昨年の6月から8月にかけて、大阪教育大学において「社会教育主事講習」を受講した。このことから今回、UEJジャーナルに社会教育主事講習での経験を寄稿させていただくこととなった。

経験を述べるうえで私の経歴と背景を紹介しておきたい。平成3年生まれの28歳。平成25年に滋賀県竜王町役場に入庁し、産業振興課(商工観光係・農業振興係兼務)2年、生活安全課(消防防犯係)2年、そして現在は、未来創造課人権広報係として配属され、6年目の職員として統計、人権、広報などを主な担当として従事している。その中で、「社会教育主事」講習を受講することとなった。「社会教育主事」はその名の通り「社会教育」や「生涯学習」に携わる行政職員や教員などが主に取得する資格のひとつであるが、私は「社会教育」を軸とした部署に配属された経験はない。しかしながら、今回、私が「社会教育主事」講習を受講することとなったのは、私自身が地域活動として「青年団」や「自治会」等に参加しており、知らずのうちに仕事ととしてではなく、普段の生活の中で「社会教育」の分野に携わっていたからではないかと、今回の受講にあたり自分自身では整理し、この受講に臨むこととなった。

### 2. 受講前の心境

職場が私に社会教育主事講習の受講を打診する際に、以前社会教育主事講習を受講した職場の先輩から「今回は、大阪教育大学での受講となるから、大阪に行けるぞ」と、飲み会にたくさん行けるよ、と暗に私に薦めてこられた。確かに普段は田舎におり、滅多に大阪に行くことはない私としては、大都会の大阪で受講し、受講後は難波あたりの串カツ屋で一杯引っかけるといのはとても魅力的なことのひとつであったが、もう一点、私自身としては魅力的で嬉しい情報があった。それは大学に行けるということである。なぜ嬉しかったのかというと私は学生時代、元々美容師を目指していたこともあり、美容専門学校に通っていた。美容師を目指していた者が公務員という真逆のような職についているかのご想像にお任せしたい。要するに私は、大学に通ったことがなかった。

そういった中、大学で授業を受けれる、ということは私にとっては人生で初めての経験であり、社会教育主事を受講するうえで非常に楽しみな点であった。大学に行ったことがない私にとっては、「大学」というのは羨ましい存在であった。大学というと俗にいうモラトリアムを過ごす「キャンパスライフ」が羨ましい、という意見が多いと思うが私が大学を羨ましく思う理由は、大学を卒業した人がもつ知識を仕事の中や生活の中で垣間見ることがあるからである。例えば、同じ職の公務員で法学部をでている人であれば、法律に関する深い造詣があることが多い。これは、普段の仕事の中で表面的に見えることは少ないが、飲み会の席などで、仕事について語るときに、行政や法律の視点が私の持つ視点とは違うのだ。

私のもつ視点は主に経験と本やインターネットなどを通して自学で培ったものであることに対して、行政や法律を大学で学んだ人の視点は感覚的な言い方でいえば「一味違う」のだ。大学での学びを経験している人は視点が多角的であることが多い様に感じ、この多角的な視点が私も欲しいと感じることが多かった。しかしながら、この視点を独学で持つことは非常に難しいとも感じていた。私は自身の「知識欲」を満たしたいという点で大学の力を借りたいと思っていたのだろう。主観的に得る知識と客観的に得る知識は同質ではないということも薄々感じていた。このことから、大学という最高学府で社会教育に関わることを授業してもらうことはこういった考えを持つ私にとって、“いい機会に恵まれた”と感じさせた。

また、「社会教育主事」については、前述したとおり、「生涯学習」、「社会教育」に関する仕事の経験はなかったことから、社会教育という仕事に関するイメージは明確ではなかった。私の勤める町役場には生涯学習課があることから、生涯学習というと、この課の業務を思い浮かべる程度であり、例えば町民運動会などのスポーツイベントに関わる仕事や、PTA、青少年育成協議会、人権教育推進協議会、少年補導員会などの各種団体の事務局の仕事のことである。

このことから、社会教育というと、PTAをはじめとして、子どもの教育に関わるような事業、スポーツ、人権といったことだろうと思っていた。また、本町でいえば「青年団」を思い浮かべる。青年団が社会教育関係団体と呼ばれる団体であることは知っていたことから、青年団に関することも社会教育の仕事のひとつなのだろう、と想像していた程度である。

勿論、この程度のイメージしか持ち合わせていないため、生涯学習と社会教育と学校教育の違いすらも知りえなかった。

ただし、当時「知識」はなかったが、青年団に関する仕事やスポーツ振興、文化振興といったことには興味はあり、いつか生涯学習課で仕事をしてみたいと思っていた。また、私が経験した仕事の中で、子どもを連れての環境学習（緑の少年団）や、防災に関する研修の講師といった類のものは人と関わることや人前で喋ることが好きなこともあり、好きな仕事のひとつであった。このように無意識ではあるが社会教育の分野に興味と意欲はあったのだと今となれば思う。

### 3. 知識

さて、まずは私が「社会教育主事講習」を終え、学んだことを述べていきたい。まず、講習で学べたことの 1 つ目は「知識」である。

そもそも社会教育に関する知識がゼロに近かった私からすれば、今回、受講した「生涯学習概論」に関する講義は全て大きな知識の学びであったのは当然である。社会教育の概念や成り立ち、歴史との関わりといった背景を学ぶことができたことは、真っ白であった私自身の「社会教育」という概念を形成することに大きな材料となった。その中でも特に私の中で深く残ったことは社会教育が戦中には「民衆教化」として変質し、国家権力によって国民が意図をもって戦争の価値観を学習させられたということである。

私は受講するまで社会教育というと漠然と「良いもの」というイメージをもっていたが、社会教育の歴史において、国民を戦争に扇動するために使われたという側面があることに私の価値観は覆された。冷静になって考えてみれば、人に物事を教えるということは良いことも悪い事も教えることができるということであり、一種の諸刃の剣的なものなのである。社会教育にはこのような属性を秘めていることは、社会教育を進める行政職員として意識すべきだろう。社会教育が行政という権力の価値観を押し付けるようなことがあってはいけないと思う。これから社会教育に関する仕事に携わるときには、「この事業は価値観の押しつけではないか」ということは常に意識していきたい。

### 4. 実践力

私が講習で学べたことの 2 つ目は「実践力」である。

講習では実践はしていないではないか、と思うところではあるが、「演習」として多くの事例を聞いたことや、グループでの企画・立案をしたという経験は私にとってより良い社会教育を「実践するため」の力となったと感じる。

自分の今までの社会教育に関わる業務を振り返り、掘り下げることで、意識をしていなかった社会教育の要素を再確認することができた。また、他人の経験を聞くことで、他市町の事例を自らの社会教育の引き出しとして増やすことができた。このことは今後、仕事をする中で企画のアイデアや業務の工夫をする際に役に立つだろう。

企画・立案では、限られた時間の中で、グループをまとめ、ひとつの成果物をつくることは、ファシリテーション能力を鍛える良い経験となった。また、グループ全員が社会教育を学んでいる人々というレベルの高い中での企画は、職場で企画する時とは違い、発想されるアイデアや、企画の進め方などのレベルも高く、今後の仕事の中で企画をするときに参考となる経験となった。現在の仕事では複数人で企画をするということが少ない。やはり、複数人で企画をしたほうがより良い企画となるだろう。

## 5. つながり

私が講習で学べたことの 3 つ目は「つながり」である。

講習の当初、「受講生同士の交流も社会主事講習の大きな要素です。」ということが言われたが、まさにその通りであった。現在の社会教育の中で、「地域連携」や「学校連携」という要素が重要視されていることは、講習の中でも知ることができたが、連携とは言い換えれば「つながり」である。私自身、町長部局に在籍しており、教育委員会部局の経験もなく、また教員と関わる業務もなかった。その中で、今回の講習では、グループワークの中で、多様な境遇の受講生が討議を行うこともあり、今まで聞いたことのない悩みや、職場での課題を聞くことができた。

特に教員の方の視点からの意見等は、行政職員にはない視点があり、やはり「違い」があることも認識できた。「違い」があるということは当たり前なのかもしれないが、この「違い」を認め合い、折衝させて行政側と教育側が連携しより良い施策を展開していくことが重要なのではないかと思う。教員の生の声を社会教育主事講習というフラットな場で聞くことができた経験は貴重であったと感じる。

また、他府県、他市町の職員との交流は、社会教育分野以外の業務においても情報を交換することもでき、私自身の行政の視点の幅を広げることができたと思う。この講習を通して出来た「つながり」が、今後の業務でもきっと活かせることがあるだろう。また、私の働く地域で連携を軸とした社会教育を実践する際にも「人」と「人」とのつながりを作りつつ、「モノ・コト」の連携をしていくという視点を持つと思う。

## 6. 大学という経験

私が講習で学べたことの 4 つ目は「大学での経験」である。

最初にも述べていたが、私は社会教育主事講習を通して初めて大学という場所で学ぶことができた。そもそも講習の中で「大学解放と社会教育」というテーマの講義があり、今回、私が大阪教育大学で受講した社会教育主事講習自体も一種の社会教育であったの

だろうが、そのような視点は、この講習を受講しなければ持ちえなかった視点でもある。

私が卒業した美容専門学校では、職業訓練校的な趣旨の学びはあったが、「学問」というものとはまた違った学びであった。そうすると私の中では、高校生の時の授業で「学問」のレベルは止まっていたのである。もしかすると、大学の授業も高校生の授業と変わらないのではないかと、という疑念はあった。しかし、当たり前の話なのだが、実際の講義は高校の授業とは違うものであった。これは社会教育主事講習という専門的な種類の講習であったからなのかもしれないが、今回の私の大学での講義の経験では、高校の授業に比べると、より物事の本質や深層を問う内容が多いように感じた。

小学校や中学校の学校教育は学問的には基礎であり、大学は応用的なイメージであったが、むしろ大学での学問は物事の深層を学ぶ、言い換えればある意味、基礎、本質というものを見るものでもあるように思えた。中学校や高校の授業のような、テストのための正解を学ぶ授業ではなく、より多くの考え方や視点に触れ考察し論議する、ということは私が学生の時に“嫌いだな”と感じた「勉強」とは違う質のものであった。また、中学生や高校生から私自身が大人になったからそう感じるようになったのかもしれない。

もしかすると 18 歳から 22 歳という一般的な大学生生活を送る年齢の自分では今回の様な姿勢で社会教育主事講習を受講することはできなかったのかもしれない。しかしながら、28 歳という一般的な学生とは違う時期にこうして大学で学べたことは、「学ぶ」ということを改めて考えさせるきっかけとなった。社会教育主事講習を通して大学に触れたことで、「知識」を得る楽しさを感じ、私の学習意欲を駆り立てることとなったことは、社会教育主事という分野に限らず、自身にとってよい経験となったと思う。

## 7. まとめ

全体を通して、受講前と比べ、社会教育に対する意識、概念が確立し、私の中で芯をつくることができたと思う。社会教育は行政が行う事業に幅広く影響していることがわかり、生涯学習課といった教育委員会部局だけでなく、企画部署や福祉部署などでも社会教育の視点は必須であると思える。このことはこの講習を受講しなければ、私の中で漠然としたもので終わっていただろう。この感覚が私の中で確信的なものに変わったことが大きな財産であると感じている。「経験」や「勘」に今回の講習で「知識」が加わり、自分自身の「自信」となったと感じる。ここに「実践」や「結果」がついてれば、自分の大きな「糧」となる。

また、社会教育主事講習を受講する中で「学ぶ」ことの「楽しさ」を感じることができ、以前よりも知識欲や学習欲が刺激され、受講前に比べ物事を調べるが多くなった。仕事をする中で、様々な疑問や知らないことが出てくるのは常であるが、今の時代はどの分野においても、私が感じた疑問や知らないことを既に研究している人がいるもので、一定の見解や考察がされている。自らの物差しだけで物事を見るのではなく、様々な視点から物事を見る姿勢を忘れないようにしたい。

私が住んでいる、また、勤める竜王町は小さなまちであり、これからの時代で持続していくにはさまざまな課題が待ち受けている。平成 26 年に日本創生会議が提言した消滅可能性都市にも挙げられており、人口が流出する中で、いかに地域を盛り上げ、人口を持続し、住民が幸せに暮らせるまちとするかが行政職員である私の使命であるが、この使命を達成するためには「社会教育」という視点は重要であると思う。地域を持続させるためには「人」が重要であり、「人」を育てる社会教育が不可欠だからである。

「生涯学習と地域再生」というテーマでの講義でもあったが、地域を学び、地域愛を育むことが、資源（生活の利便性）を持たない地域が生き残る大切な要素だと思う。行政職員として、これからさまざまな部署に異動することもあるだろうが、今回の講習で学んだ要素をこれから携わっていく仕事に活かしていきたい。また、できれば青年層への地域愛を育む仕組みづくりに携わっていききたいと思う。

---

木ノ下 敬太郎 (きのした けいたろう)

1991 年、滋賀県生まれ。日本美容専門学校卒。現在竜王町役場未来創造課主事  
趣味は映画鑑賞、絵。